市民が主役

風景との出会いが楽しい

～気ままにぶらりスケッチ～

南雲義男（なぐも よしお）さん

柳瀬川や金山緑地公園など、自然が豊かな清瀬市では、晴れた日に野外でスケッチブックを開いている方をよく見かけます。風景画家の南雲義男さんもそのうちの一人で、野外スケッチの魅力にはまり、市内をはじめ市外にもぶらりと赴き、気に入った場所を見つけるとその場で風景を描きます。

郷土博物館で2001年から隔年で個展を開催する他、昨年10月には西武線全路線を巡って描いた作品を出版。本は1か月もたたないうちに売り切れるほど好評でした。強弱ある鉛筆のタッチと水彩絵の具の優しい色合いで描かれる南雲さんの作品は、どこか懐かしい感じがして、不思議な魅力を感じさせます。

今回は、南雲さんに風景スケッチの魅力について、お話を伺いました。

新潟の山村で育った南雲さんは、「自然に親しんでいたことが風景画の原点かも」と話されます。幼少から書や絵が好きで、教室に展示されることが多々あったそうです。

本格的にスケッチを始めたのは約30年前。元々は水墨画の教室に通っていましたが、「外でのびのびと絵を描きたい」と思いはじめ、野外で描いてみたところ、その気持ち良さにはまり、すっかり野外スケッチのとりこになってしまったそうです。現在は、絵の教室で人物画を学ぶ傍らで、「風景スケッチ会」も主宰し、西武線沿線で月3回活動しています。

また、「プロよりも素人の方が目線が低く分かりやすい入門書を作れるのでは」と2012年4月には、初心者向けのスケッチ本を出版し、絵を描くことの楽しさを広める活動にも力を入れています。

100ページ現地主義

写真を撮って自宅で描く方も多いですが、南雲さんはその場で描きます。「現地で気温や日光、風を直接肌で感じながら描くと、その場の雰囲気が画面に現れて良く伝わるし、その時々の光の加減による明暗など、写真では分かりにくい微妙な色合いもしっかりと把握できる」とのこと。また、「風景を目の当たりにして描いた絵は、景色が目に焼き付いて心のなかに残っているのか、ずいぶん前に描いたものでも当時のシーンがはっきりと浮かんでくる」そうです。

「見たままの風景を短時間で描くことで、作品に臨場感や個性が生まれる」と自身のこだわりを語る南雲さん。現場で描いたスケッチが味わいのある絵に仕上がった時の満足感は格別だそうです。

野外スケッチの魅力

野外スケッチの魅力を伺うと、「さわやかな外気のなかで絵を描くとストレス解消にもなり、季節の移り変わりに敏感になります。また、歩くことは健康づくりにもつながり、お金をかけずに楽しむことができる」と楽しそうに話されます。

「暑い日や寒い日など、野外で描くのは厳しい時もありますが、厳しい環境で描いた作品にはそれなりの強い思いがあるので記憶に残る。また、季節にはそれぞれの趣があり、絵の材料は尽きない」と言います。

南雲さんが主宰するスケッチ会の会員は高齢の方が多いそうですが、80歳以上の方も元気に活動しているとのこと。会員の皆さんも野外スケッチの魅力にはまっているのでしょう。

秋津にあったしょうゆ工場を描き、作品の成果を前に皆で記念撮影

スケッチ終了後は、会員の皆さんが描いた作品を並べて講評を行う

西武線全線を制覇

昨年10月に、西武線全92駅を巡り描いた165作品を一冊の本にまとめた南雲さん。初めは清瀬市内を中心に絵を描いていましたが、個展を開く度に来場者から、「自分の住んでいる地域も描いてほしい」と言われるようになり、徐々に遠くの地域にも足を延ばすようになったそうです。やがて、「どうせなら全部の駅を描いちゃおう」と思い、約10年かけて西武線沿線の風景スケッチを描かれました。

西武線全線全駅の作品が、親しみやすいタッチで描かれ、コメント付きで紹介されている。（市内各図書館で閲覧可）

題材は駅を降りてから歩いて探します。気に入った場所を見つけるとその場でスケッチブックを開くのが南雲さんのスタイル。題材を探して歩き続けるうちに、3駅先の駅に着いたこともあったそうです。作品のなかには、駅前開発などで今では消えてしまった風景を切り取ったものもあります。

偶然の出会いが面白い

南雲さんは、最初は名所や観光地などを中心に描いていましたが、描ける場所に限りがあるためだんだん行き詰まってきたそうです。その後、絵の幅を広げたいと思い取り組んできたのは「自分の目で探す」こと。「初めて訪れた場所で右に行くか左に行くか、ここが楽しみの広がるスタート地点です。感動する風景との出会いを期待してぶらりぶらりと歩きます」とほほえみます。

普段は週2、3回、健康も兼ねてスケッチに赴き、1作品は約1時間で完成させるそうです。多い時は1日3枚も描くとのこと。

南雲さんが愛用するスケッチ用の鉛筆「ダーマトグラフ」。軸先の糸を引くと新しい芯先が出る構造でナイフがいらず、野外で活躍する

清瀬市内の小道。ダーマトグラフで描いたもの（左）は鉛筆で描いたもの（右）と比べ線に迫力が出る

そして、「作品を描く時は、一発勝負。間違えても消しゴムで消えない鉛筆で描きます。一気に描くときに消しゴムを使っている時間はないので、致命的な間違いでなければ、そのまま残すことで動きが出て、かえって面白い効果が出ることがあるし、だからこそ短時間でさっとできる。ただ、『早く描く』と『雑に描く』とはまったく違う。ポイントとなる主体の線はしっかり描き、他は一筆書き的に一気に描き上げる」と語ります。

出かける前に地図で調べたりはせず、行き当たりばったりで道路を歩いていると「この先は何かありそうだ」など、なんとなく肌で感じられるようになるそうです。1万歩くらい歩いても描きたい風景が見つからないこともあるそうですが、そんな時は「よく歩いたから足腰を鍛えることができた」と気持ちを切り替えるそうです。

また、近代的な建物が多い街より、古い建物などレトロな感じを好む南雲さん。例えば市内では、秋津のしょうゆ工場が格別に好きだったそうですが、今では取り壊されて更地になってしまっています。「最近は、宅地開発などで昔の建物がどんどんなくなってきています。駅舎も奇麗になってきていますが、描く題材が減るのは少しさみしいです」と心境を語りました。

上達のコツとは

絵がうまくなるためには、1枚でも多く描くことが大切で、最大の要因は「継続すること」と「楽しんで描くこと」だそうです。

「急激に夢中になって急激に熱が冷めるということにならないように、牛歩のごとく一歩ずつ確実に歩んでいくような気楽な気持ちで進んでいくと、一生楽しめるものになる」と話されました。また、「自分のペースを積み重ねる他に、目標を持つことも大事。例えば作品を展示したり、同士の仲間を持つこと。何年も続けるうちに壁にぶつかることもありますが、互いに助け合ったり励まし合ったりすると続けていくことができる」と、上達のコツを教えてくれました。

今後も気ままに

今後の目標を伺うと、「一大目標の西武線ぶらり旅を成し遂げたので、特に大きな目標は決まっていませんが、遠くの方にも足を延ばしたい」と楽しそうな様子。

時間があればスケッチブックを持って歩きまわるスタイルは、今では完全に南雲さんの生活の一部です。「野外に出かけられる体調と、のんびりと絵を描ける環境に感謝しつつ、今後も気ままにぶらりと風景を描き続け、ささやかな趣味を楽しんでいきたい」と話されました。